

[巻頭言]

「やっこう」論文？

学会誌前編集委員長
山口 高平

はじめに

今年の総会を持ちまして、2009年より3年間務めさせて頂いた学会誌編集委員長を無事退任させて頂きましたが、本巻頭言では、情報システム学会 (ISSJ) ジャーナル論文についての感想を述べさせていただきます。

掲載 (別刷) 料無料

日本の多くの学会は、会費と論文掲載料 (別刷料) を経営の2本柱にしています。掲載 (別刷) 料は、規定ページ数に収めて10万円弱、ページ数が超過すると20万円を超える事もあります。ISSJでは、掲載 (別刷) 料を原則無料にしており、これは特筆すべき会員サービスになっています。

原則3回査読

投稿論文に対して、1回目の査読で種々のコメントを行い (照会)、2回目の査読で、その照会が満たされたかどうかを判断して、採否を決定している学会が多いですが、ISSJでは、実質的にコメントする機会を2回設けて、3回目の査読で採否を決定することを原則としております。当然、論文に本質的な問題があり、何回照会しても改善が期待できないと判断された場合は、1回目の査読で不採録になりますが、原則、実質的なコメントを2回行います。

今まで、いくつかの学会の編集委員 (長) を経験してきましたが、ISSJは他学会と比較して、著者と査読者の間に緊密なコミュ

ニケーションを設け、投稿論文をよりよい論文に仕上げているという風土ができつつあると感じています。

「やっこう」論文

論文の主な査読基準は、新奇性・有用性・信頼性であり、複数人査読により、厳格に査読がすすめられています。学会 Web ページに記載されていますように、情報システムは「人間活動を含む社会的なシステム」であり、単なるコンピュータ応用システムではありません。情報通信技術と人・組織・社会を両端とするスペクトルの中で、様々な論文が投稿されてきます。情報通信技術と人・組織・社会との実際の関わりを深く洞察した実践論文が望まれますが、その反面、論文の書き方が難しくなり、「やってみたらこうなりました」 (以下、「やっこう」と省略します) というタイプの事実列挙型論文になりがちです。

「やっこう」論文の場合、思考過程の分岐はあまりなく、一本道でやった事を書いていく傾向がありますので、他の研究・方法との関連性が見えません。本当に、筆者の提案手法しかないのか？ こういう別の考え方・手法もあるのでは？ と、論文を読んでいて、そのような疑問がすぐに浮かんできます。類似・関連研究は必ずあるはずで、その比較を通して、研究の位置づけを明確にしないと、新奇性が不明確になります。

また、「やっこう」論文では、この問題 (事例) で、こうやったらこうなって成果があがったと主張されますが、どのような場合なら役立って、どのような場合には役立たないのか、いわゆる、システム適用の境界条件が明確でないために、他の問題を抱えている読者にとっては、この論文が参考になるのかどうか判りません。実世界問題を対象にした実践論文、特に、人・組織・社会との関わりが深い現実問題を扱ってい

Takahira Yamaguchi

慶應義塾大学理工学部

Faculty of Science and Technology, Keio University

[巻頭言] 2012年9月11日受付

©情報システム学会

る場合は、再度、別の方法で同じ問題にアプローチすることは困難で、定量的評価が困難な場合がありますが、そのような場合でも、定性的考察を通して、提案手法が、どのようなタイプの問題なら適用可能かを検討する必要があり、それが客観性・信頼性を担保することにつながります。

論文投稿状況

論文投稿が少ない時期がありましたが、この1年間は、毎月1編のペースで投稿されてきています。現在、これらの論文は査読中のものも多く、確かな事は言えませんが、1/3程度は採録されるのではないかと期待しています。しかしながら、依然、不採録になるケースが多く、これは、前述した「やっこう」論文の問題、および、残念な事ではありますが、内容に本質的に問題がある論文も散見されます。

おわりに

情報システム学会の健全な発展のためには、ジャーナル論文の掲載が欠かせませんので、学会では、元編集委員長の神沼靖子先生、編集委員の原潔さんを中心に、「情報システム論文の作成および査読のありかた研究会」(<http://issj.school-website.jp/writing/2012/about/>)が開催されています。論文投稿者を直接支援するような研究会は、他学会では類がなく、本学会の会員の皆様にぜひ利用して頂きたい研究会です。研究開発成果があるがまとめ方が分からない、具体的なレベルで論文執筆方法を学んでみたい方々、ぜひ、本研究会に足をお運び頂き、会員皆様の成果が、ジャーナル論文として広く公開されていくことを期待しております。